

れている。今回我々は、^{99m}Tc-グルコン酸カルシウムを試用する機会を得たので若干の検討を加えて報告する。

使用装置は、Nuclear Chicago 製 Pho/Gamma Hp 型シンチカメラで、data store, play back system が付属している。

試薬を 4～5 mCi 静注後、10分まで 2 分毎の集積像を、その後は 15, 20, 30, 60 および 120 分前後の 2 分間集積像を撮り、更に magnetic tape に store した data を play back して、血管相 (0～120 秒を 5 秒毎の集積像で) の撮影と関心領域曲線の記録を行った。これらを主として正常例 (6 例)、そのほか腎不全、腎腫瘍など計 12 例を対象に行った。

正常例では、¹³¹I-Hippuran, ^{99m}Tc-EDTA, ^{99m}Tc-DMSA と比較したが、いわゆる排泄動態を調べる dynamic study では ¹³¹I-Hippuran が鋭敏であり、static image をみるには DMSA がより優れていることが分った。^{99m}Tc-グルコン酸カルシウムは ^{99m}Tc-EDTA とほぼ同じ排泄態度が画像の上で示されることが分った。

腎不全でも BUN 100～80ng/dl 程度の例では、本試薬は background が高く、¹³¹I-Hippuran の像より劣ることが示された。ただ腎腫瘍などの cold area の描出には、むしろ background の高いことがよい contrast をつける意味で都合よいように思われた。

機会があれば、更に症例を追加し、本試薬の特徴を更に明瞭にしたいと考えている。

26. 売丸腫瘍患者に対する α -fetoprotein 測定の意義

上田正山 町田豊平 三木 誠 南 武
(慈恵医大・泌尿器)

Radioimmunoassay による α -fetoprotein 測定の臨床的評価は、原発性肝癌以外の疾患にも広く認められるようになってきた。われわれは睾丸腫瘍について、術前診断、治療効果、あるいは予後判定に如何に有用であるかを報告する。

対象症例は昭和47年6月以降、当科に受診した睾丸腫瘍35症例である。全症例中、除睾術前より全経過にわたって AFP を追跡したのは21例で、 AFP 測定方法は Radioimmunoassay 法と赤血球凝集法を用いた。又 AFP と病理組織との関係をみるために Dixon and Moor の分類を採用した。

結果： AFP 20ng/ml 以上を陽性の基準とすると睾丸腫瘍35例中、 Dixon and Moor の分類の Group II で10例中4例、 Group N では 4 例中 3 例が陽性であった。又除睾術前より AFP を測定した21例では Group II で 4 例中 3 例、 Group N で 3 例中 3 例、計 7 例中 6 例に異常な AFP 値の上昇を認めた。これらの陽性例は術後約 1 週から 8 週迄に AFP は 20ng/ml 以下に下降した。同時に GOT, GPT も測定したが、どの症例も正常範囲内であった。

以上の成績から第 1 に、術前診断として胎児性睾丸腫瘍の鑑別、第 2 に治療効果の判定、第 3 に術後経過観察に役立つと考えている。従来睾丸腫瘍では纖毛上皮腫の鑑別診断のために妊娠反応が必ず行われているが、今後は胎児性腫瘍診断のために、 AFP 測定を必ず合わせて行った方が良いと考えている。